図画工作教育講座２　《　目標　》

図画工作教育の目標とは
平成３０年度実施の新学習指導要領では、目標が３項目に分かれている。

> 表現及び鑑賞の活動を通して，造形的な見方・考え方を働かせ，生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。
> (1) 対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに，材料や用具を使い，表し方などを工夫して，創造的につくったり表したりすることができるようにする。
> (2) 造形的なよさや美しさ，表したいこと，表し方などについて考え，創造的に発想や構想をしたり，作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。
> (3) つくりだす喜びを味わうとともに，感性を育み，楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い，**豊かな情操を培う**。

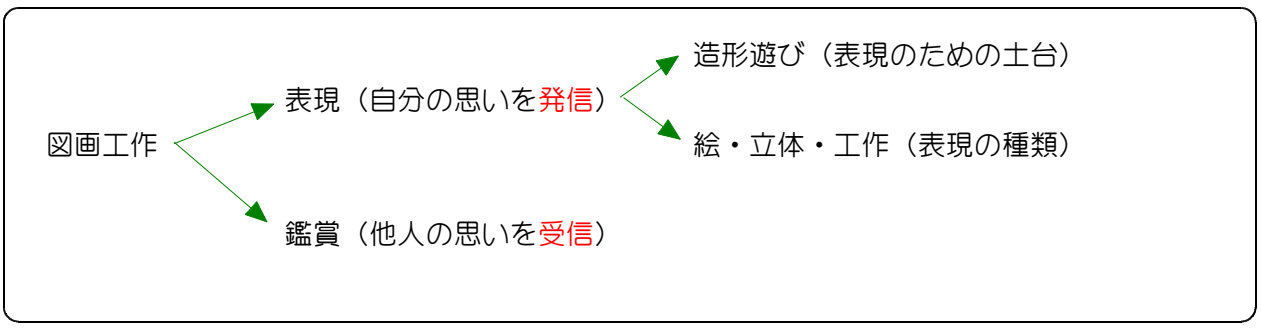
（１）で子どもたちの**表現力**を育み、（２）で子どもたちの**鑑賞力**を育み、それらを受けて（３）で子どもたちの**人間力**について目標を提示してあるが、用語が多くて分かりにくい。
つまり、図画工作教育が目指す最終目標とは、最後の一節「豊かな情操を培う」こととなる。

では、情操とは何か～文科省の解説では
情操とは，美しいものや優れたものに接して感動する，情感豊かな心

すなわち、
図画工作教育は、「心を育てること」を目指す。絵描きの卵を育てる技術重視の専門教科ではない。

さらに、情感豊かな心は、学習指導要領の基本理念である「生きる力」のもと。
言い換えれば
図工教育は、子どもの人生を豊かにするツール。
そのために小学校の図工教育では、図工のイメージをプラスにしておくこと。
「絵を描くって楽しいね」
「ものを作るって面白いね」
好きにさえしたら、自分で楽しみながら取り組んで伸びていく。→生涯教育の基盤

図画工作の内容構成
学習指導要領で図画工作の内容は２つに大別される。図画と工作ではない。



では、実際に現場では

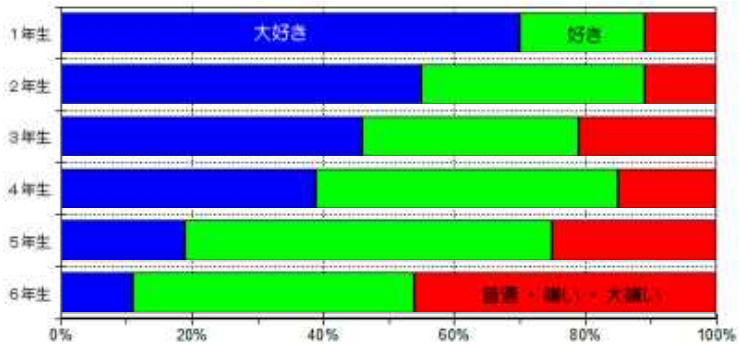
帯山西小の取り組み

　児童数７００人の中規模校で図工に関する意識調査を実施

学年が上がるにつれて、「大好き」が減る

原因　上手に描きたいという子どもの思い

　　と上手に描けない現実とのギャップ



上手に描きたいという子どもたちに

絵の得意な先生　→　**指示**を連発

「ここにお花を沢山・・」

「空に雲を、鳥も３羽くらい」

「向こうで手を振っているお友達を３人・・」

子どもの手を使って、
先生の感性を作品化

＊自分で考えようとしない人間を育てることに。

＊感性のある子どもにとっては、指示が苦痛に。→ 好きが減る

絵が苦手な先生　「自由にのびのび描いてね」

「自分の好きなように描いてね」

つまり**放任**

向上するための情報がないから、表現が変わらない。停滞したままでは楽しくない。→ 好きが減る

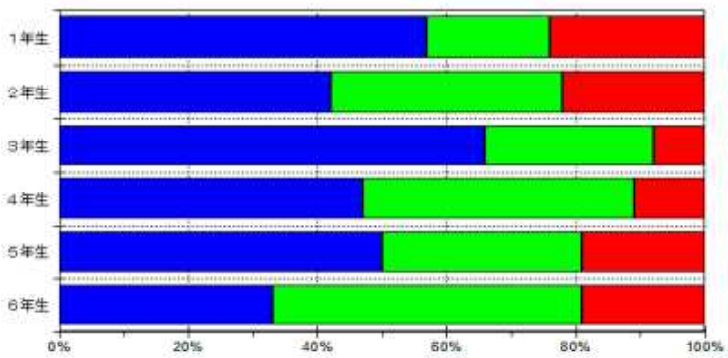
なんとかしなければと、市の委嘱を受けて図工の授業を見直す取り組みを。

それから２年後。

同じ設問で　→　「大好き」が増えた。

原因　教師の意識が変化。

　　図工に対する考え方が変わった。



教師の意識が変わると、評価の視点が変わる。

＊本物そっくり
＊丁寧さ
＊綺麗さ
＊隅々まできちんと

→

＊楽しさや嬉しさを感じる
＊驚きが表れている
＊静かさや落ち着きを感じる
＊力強さが分かる

つまり、
似ているとか上手とかよりも
自分の思いが表現できているか

しかし、

取り組みの課題も。　低学年では「好き」が減った。

原因　自分の思いを重視した指導になりすぎた。

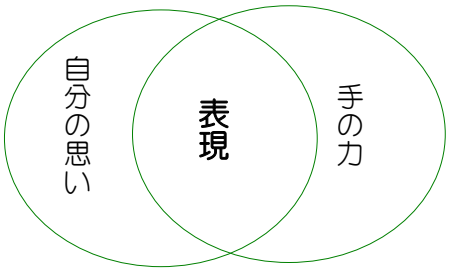
　　低学年では「自分の思い」はまだ無理。

　　お絵かき遊びの自由さが必要。

子どもの思いを表現するには、「手の力」が必要。
その指導法の１つとして

１本線描法（クロッキー）

クロッキーとは、主に動物や人体など動きのあるものを素早くとらえる訓練として行われる短時間スケッチで「速写」とも言う。１本線で表すことが多いので、小学校ではゆっくり１本線で表してもクロッキーと称している。



クロッキーのやくそく

①　つまみ握りで　→　絵で表現するぞという意識化・心構えを持たせる
　　字を書くときは鉛筆握り・絵を描くときはつまみ握り
　　※　支点は肘だから、鉛筆握りより描くときの半径が大きくなる。

②　ゆっくり見ながら　→　自分の思いを込めやすい＆対象をよく見るにはゆっくりでないと無理。

③　１本線で　→　短時間集中
　　子どもの集中力は短いから、何本も線を引いてその中から形づくるようなデッサンは集中力が途切れてしまう。

④　消さないで　→　消しゴムを使わない。間違いの線はそのまま残して、間違った箇所に戻って描き進める。（消したい誘惑に負けそうになるが、だんだん慣れてくる）

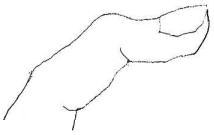
対象　人物　子どもの絵は人物（自分）が主役だが人を描くのは苦手な子が多いので、慣れさせるため。
用紙　Ｂ５用紙　用紙が広いと負担になる
描材　パス　線がはっきり見える色（黒/焦げ茶/藍/深緑など）
　　子どもに選択させることで小さな決断の積み重ねをさせたい。
　　色によって絵の感じが変わることも経験させたい。

視点がちょっと動けば、形は違って見えるから、
いきなり人物（立体）をクロッキー（平面化）は難しい

①　教科書の人物イラストを模写することで人物表現に慣れる
②　写真の人物をクロッキーすることで平面化に慣れる
③　人物クロッキー　２人組で３分交替
　　顔の中身は後回し→輪郭優先
　　似ている似ていないと顔にこだわる子どもも居るので
　　そんなときは顔の見えないポーズで全体像をとらえさせる

レポート　手のクロッキー
１　自分の手を左右の眼でかわるがわる見て視点の変動を確認（難しさはこれが原因）
２　「クロッキーの４つのやくそく」で表現
＊　１本の線で表すことを意識しながら描く。＊
　指の柔らかさは薄い線や細い線で・爪の硬さを濃い線や太い線で。
　完成しなくてよい。形を見つけて１本の線で表現することがねらい。

＊　この講座で私が最も大切と思ったのは、「楽しい」と感じさせることである。



自分の手を描くクロッキーの授業で、絵に自信がなくて、最後まで描き終えるどころか１本の指も仕上がらなかった手のクロッキーが、次の授業で「この指のふくらみが良い」と言われて、とても嬉しかった。自分の絵が褒められたこと、良いところを見つけてもらったこと、出来ないことも受け入れてもらえたことに感動した。

自分の思いを表現する喜びや、自分なりに作品の良いところを見つめる嬉しさを感じるような授業によって、子どもは生き生きと楽しく学べると実感した。

＊　私が最も重要だと思うことは、絵が上手な先生、下手な先生それぞれに良いところと悪いところがあるということ。私自身が絵を苦手としているので、自分が本当に教師になったときに、絵の指導に全く自信がなかったからである。

講座で話を聞いて、苦手な教師にも良いところがあると知ったので、もし授業をする機会があったら、絵を苦手とする子ども達にも楽しんでもらえるような授業づくりをしていきたいと思うことができた。

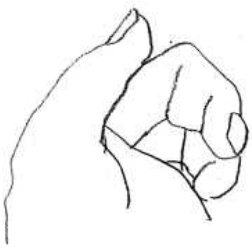
少し楽しく感じることができるようになった。

＊　最も印象に残ったのは、子どもたちの思いを授業の中でも大切にするということです。

絵の得意な先生・苦手な先生のメリット・デメリットが講座の中でありましたが、私が専攻している音楽教育においても、先生が自分の表現を大切にしすぎて、生徒の表現をふさいでしまっていることもあります。これはある意味危険なことでしょう。

＊　私は「図工」や「美術」は、一部の選ばれた人にのみ楽しめるものであり、私はその選ばれた人ではないと思っていました。

しかし、この講座で、「楽しく」表現する「楽しく」技法を習得することを体験し、図工も美術も万人に開かれているもの、特に図工においては、教師の工夫によってどのようにも「分かる（できる）し、楽しい」ものにしていけることを実感しました。正規に採用されて４月から現場に立つ者として、直前にこの講座を受けられて本当によかったと思います。



＊　私はもともと絵を描くのが好きではなかったのですが、この講義を受けて図工への意識というものが変わりました。今まで上手に描かなければならないというプレッシャーが心の奥底にずっとあったのですが、様々な表現技法に触れ、自分が見て感じたことを豊かに表現できるようになり、喜びを感じることが出来るようになりました。クロッキーの授業では私の描いた絵をパワーポイントで映し出し、授業を受けている学生全員の前で「細部までよく見て描くことが出来ている」と褒めていただき本当に嬉しかったです。

小学校時代に受けていた授業は「自由に描いてください」という形式のものが多かったので何を描いたらよいのか分からなかったのだと思います。私が実際に教壇に立ったときは、授業のねらいを明示し、子ども達に「分かり易い」「楽しい」と思ってもらえるような授業を心がけたいと思います。

＊　私がこの講座で重要と思ったのは、子どもたちに楽しい授業を提供するということです。

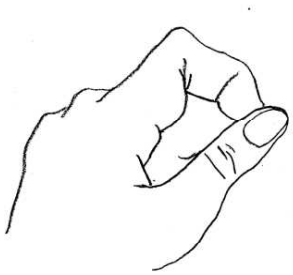
私は絵が苦手で、小学校高学年くらいから図工が嫌いになりました。今、ふり返ってみると、当時は図工

といえば「自由に」「あなたらしく」という言葉だけ与えられて放任されていて，何も身に付けることができなかったように思います。私の小学校のときの先生も図工が苦手だったのだと思います。
　私自身は苦手でも、図工についてもっと学び、子どもたちをいろいろな視点から誉め、それぞれの個性を育てられるような教師になりたいと思いました。

＊　私はこれまで、図画工作の教育とは題材を子どもが決めたら，細かいことは先生がアドバイスしてよい出来上がりにすればよいと思っていた。しかし、この講座を受けて、それでは先生が児童に描かせただけのものになってしまうと気付いた。実際、自分の小学生の頃を思い返してみると、先生に何度も聞きに行ってアドバイスを受け、その通りに仕上げて提出していた。誉められるのは嬉しかったけど、何かが違う気がしていた。そして、この講座を受けて、そのとき感じていた違和感の理由が分かった。あのとき私が描いていたのは自分の思いではなかったんだと。
　私が教員になって図工の授業をするときが来たら、私の主観的なアドバイスはせず、児童たち自身が思い描く作品づくりの手伝いに徹したい。

＊　図工は、楽しさを伝え、豊かな感性を育てることが重要だと思った。
　小学校のとき、美術が専門の先生の図工の授業は、技法を中心とするものでとても厳しく、遠近法の使い方が違うなどと怒られ、図工の時間が億劫（おっくう）になっていたからである。

＊　教師の取り組みが最も重要である。私は図工が苦手だったため、大学に入ってからも教師になるうえで大きな不安があった。「苦手な人が教えることができるのか」というその不安は、この講座を受けて大きな期待へと変わった。子どもが積極的に取り組むための工夫、苦手な子への対応など子どもが図工を好きになる、楽しいと思うことができる教師の取り組みや支援の実際について学んだからである。



＊　上手な絵を目標にしないこと、そして教師自身が柔軟性を持つことが最も重要だと、私は感じました。　自分が教師になったとき、子どもが絵を見せに来たら「雲を描いてみたら」「色を変えてみたら」と、よい絵にしたいという思いから自分の感性を押しつける指導になる危険があることに気付かされたからです。
　「ものはみよう」というように、よい部分、自分にとって新しい感性が見える部分を見つけてたくさん褒めることができる。そんな教師はとても魅力的に感じるし、目標にしていきたいです。

＊　私は絵が苦手なので、自分が本当に教師になったときに、技能の指導に自信が全くなかった。この講座で先生の話を聞いていて、苦手な教師にもよいところがあることが分かったので、もし授業をする機会があったら、子どもたちが（絵を苦手とする子どもも含め）楽しめるような授業づくりをしていきたいと思うようになった。少し楽しく感じることができるようになった。

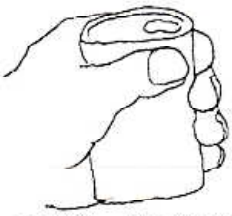
１本線描法の５分間教材

これは素材例です。自校の学校行事や地域の特色を活かした素材が、もっと子どもの意欲を喚起して効果的です。漢字力も計算力も「短時間と継続」が「力」に。１本線描法も然り。

１本線怪獣

１本の線だけでできる怪獣をかいてみよう。名前も工夫して。

ものを持っている手



握る、つかむ、持つなど手の表情を感じとりながら、指の曲がりや重なりをかいてみよう。

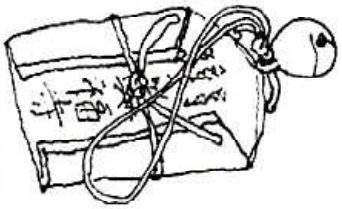
花のつくり

花を一輪だけ。
雄しべやめしべなど理科の学習と関連させて見つめる力を。

写し絵

いろいろな教科書の挿絵や写真の人物を「１本線」でトレーシングペーパーに写し取る。

夏の思い出

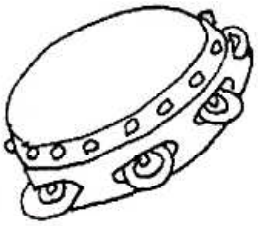


今年の夏の思い出の品を、そのときの出来事を思い出しながらよく見つめてかいてみよう。

はやいぞ！

運動会の時期！
速く走っているように見える足はどんな曲がりで？その足だけかいてみる。

音楽会の楽器

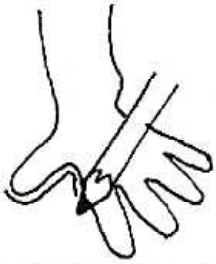


音楽会で使う自分の楽器。細かいところまで見ながら丁寧に。

後ろ向きの人

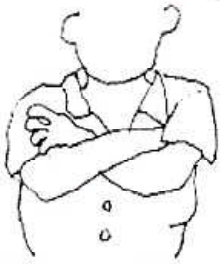
体全体の形をかくが、完成しなくても可。形見つけを優先。

変身する手



自分の手を写し取り、その形から思いつくものを。

腕組みをした人



上半身をかく。組んでいる腕からかき始める。顔は後回し。

○○妖怪

こんなのがいたら面白いなと思う妖怪をつくり出す。名前も。

○○な先生

この１年間で最も印象的な先生の部分を自分で決めてかく。「時計を気にする先生」など。